RUUCAMI　ADVENT

なもなき騎士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＲＵＵＣＡＭＩ　ＡＤＶＥＮＴ

【Ｎコード】
Ｎ７０９９Ａ

【作者名】
なもなき騎士

【あらすじ】
平凡な高校生「辰児」は、時の止まった村「お伽村」に迷い込む。不思議な村人や、村に隠された数々の謎は、彼の内に秘めた力を目覚めさせてゆく。「神殺し」の名を背負った辰児を待つものは・・・

序章〜源〔ゼロ〕〜

〈壱〉

―闇だ
何処までも続く暗黒
全てが
　混沌に満ち
万物が
　魂という概念を持たず
森羅万象は
　命を紡ぐことをやめる
　　そんな奈落の闇―

〈弐〉

（ここは……ここはどこだ？あれから俺は……なんだ！？放せ！はなせよ！！）

あの時から、どれだけ経ったのだろうか。永久ほど長いものは無いが、もしかすると、時計は時を刻むことに嫌気がさしたのかもしれない。
そんな考えが浮かぶほど、永く夢見た時間の先に。

陽光が射す中、少年の布団を取り囲むように、人々は座っていた。皆、うつむいているので表情は分からない。だが、ひんやりとした空気がその場を取り巻いているのが分かる。

一人の少女が少年の額の熱くなった布きれを交換する。
心配そうにするその少女の顔には、整った目鼻口――誰が見ても、美人と答えるだろう、その彼女の表情は、酷く澱んでいた。

月影が柔らかく空を覆う頃、昼間の人影は見えない。だが一人、寝息を立てる少女の姿が月明かりに映る。あの少女だ。ずっと看病していたのであろう、彼女は横になることも無く、正座のまま少年の側で寝入っていた。
一方少年は意識を取り戻したのか、ゆっくりとまぶたを開ける。
（うっ……まだ生きてる…のか、俺は……？）ぼやけた視界を部屋中に向ける。
少年はズキズキ痛む頭を押さえ、上半身を無理矢理起こして辺りを見回す。そこが日本間の部屋だと分かるには時間がかかった。
ふと、布団の脇を見ると、桶が水に浸っているのが見える。誰かが自分を看病してくれていたのだろうか。そんな考えが頭のどこかで浮かんで消えた。
（綺麗な月だ……）開いた障子から見える景色に一瞬心を奪われた。
自分が何処から来たかなんてどうでもいい。そんな風に思ってしまう。が、やはり体が思うように動かないのか、直ぐに布団に倒れ込む。
（痛たたた……ん？この感触は……まさか！？）少年が感じたのはやわらかい温もり。不意を突かれた――灯台下暗らしとはよく言ったものだ。
彼の目前にはあの少女の寝顔が目と鼻の先、吐息が彼の顔に当たる。しばらく少年は思考を巡らしていたが、直ぐに顔を真っ赤にして、
「わぁ！？だ、誰だ？！なんで……いっ！」
跳び起きたが、案の定ズキンと痛みが走り、涙目になって頭を押さえる少年。

次の瞬間、眠りから覚めた少女は彼に飛び着いていた。
「うにゃー！よかったー！！！」
【ズドン！】
そして、再び少年の意識は空の彼方へ飛んで行ってしまう。

〈参〉

遡ること、3日前。
「父さん……やっぱ迷ってない？」
荒い息遣いの途中、少年は渇いた喉を振り絞る。
「迷ってない。」少年の父親らしい５０歳前後の中年男は断言する。
真夏の日差しが差し込む、まるで異世界のような樹海。二人は道無き道をそれぞれ違う歩幅で進んで行く。
「ここ、さっき通らなかった？」
「そんなわけないだろ。気のせいだ。」
またもや断言され、少年は呆れて溜息も出ない。
（何でこんな所にいるんだよ……俺は）半ば自己嫌悪に陥る彼の服装は、Ｔシャツにジーンズと、かなりラフな格好だ。ただ、首に提げられた首飾りと、右腕に無造作に巻かれた包帯が、一際目立った。
それに比べ、いかにも探検家らしい〔実際は結構有名な学者なのだが〕彼の父は、小さな丸渕眼鏡を曇らせ、大きなリュックと少々出た腹をユサユサ揺らしている。
肥りぎみの父だが、少年よりも足取り軽く、樹海を先導して行くのだった。

黒い山脈。目の前の光景をそう例えるしかない。長き未知の先に見たものだった。
それは、二人を拒むかのように佇んでいる。
「これが……地図にない……とうとう着いたか。」

短く呟いたかと思えば、躊躇することなく、少年の父はそれに歩みよる。
「父さん！」
少年は叫んでいた。自分でも分からない。だが、体が知っている。あれは危険だ、と。
その瞬間、山が揺らいだ――本来の姿に色付いていく山肌、空を黒く染めてしまうほどの鴉が飛び去って行く。
【バサっバサっバサ】
二人は黙して、ただそれを見ているしかなかった。
「ハハハ……なんの歓迎だよ……」
目の前の事実に対し、笑うほかなかった。しかし、父は真剣な眼差しで、動じてもいない様子だ。
少年は息を飲む。
何もかもがおかしい。けど、これは夢じゃない。
黒い影が去り、残ったのは大きく口を空ける、鍾乳洞だけだった。
「ホント、何でこんな所に来ちゃったんだよ！俺！」

二人がここに来た理由。それを話すには、また少し時を遡る必要がある。

〈肆〉

何の変哲もない朝の風景。

少年は起床すると、しっかりと寝癖の付いた頭を、無造作にかきながら台所へ。時計は9時を回っている。
「はぁ～……おはよう……」
父は椅子に腰かけ、コーヒーカップ片手に新聞に見入っている。スーツ姿なのは、仕事のせいだろう。変に板に付いている。
「おはよう。父さんな、そろそろ出かけるから、留守番頼むぞ。」

テーブルにはトーストと牛乳、そして簡易なサラダが並んでいる。今朝の朝食だろう。
『昨夜大平洋沿岸で発見された、謎の生命体のものと思われる遺骸は……』テレビからは世話しなく、アナウンサーの声が聞こえてくる。
「今日も学会？遅くなりそう？」
「ああ、今夜は帰れそうにないんだ。朝倉さんに夕食は頼んであるから。」
朝倉家は、少年のお隣りさんにあたる。
「げっ、鈴雫の所で？あいつ何かとうるさいんだよな～」
思わず溜息がでてしまう少年。
朝倉鈴雫。少年と同じ高校に通う、幼なじみだ。今は夏休みなので、部活動をしていない少年はもちろん学校に行くことはない。
「ハッハッハッ、我慢してくれよ。」
そう返すと、父は重い腰を上げ、そそくさと玄関に向かう。少年はそれを見送ることもなく、トーストに噛り付く。やっぱりトーストは焼きたてに限る。すると、父が何か思いだしたように戻って来る。
「そうだ、週末は空けておいてくれ。お前を連れて行きたい場所があるんだ…。」
そう言うと、すぐに出て行ってしまう。
いつもと少し違った。そんな気がした。最後の言葉には迷いが感じられたからだ。
（連れて行きたい場所……か、どこだろ…）深くは考えない。何より、寝起きで頭がはっきりしなかった。
『今朝、最新鋭のパワードスーツの開発が、ＡＤＡＭ社から発表されました。テストスーツの運用は米軍と提携……』相変わらず騒がしいニュースに、目を向けることもなく朝食を口にほおばる。
今日も何もない一日だ。
何の変哲もない朝の風景。だが、この時からだ。

鈍い音が響いた。

〈伍〉

もう三日は歩き続けてるけど、ここが連れて行きたいって言った場所なのか？

軽い気持ちで父と出発した少年。父の仕事柄、こういう探検にはよく連れて来られていたのだが、今回は今までのそれとは違っていた。

二人は懐中電灯の明かりだけを頼りに、暗闇の鍾乳洞を奥へと進んで行く。

天井から垂れた、氷柱のような鍾乳石は、小さな水の雫を生む。冷気を帯びた雫は、その命を散らすことにより、音色を奏でる。

【ポツン】

決して足場は良くなかった。滑りやすく湿っている――というよりも、まるで先刻まで水に浸かっていたような。

「父さん。なんかここ、おかしくない？本当に鍾乳洞なのかな…」

少年は足元を見て問い掛けた。

「お前は鍾乳洞や洞窟は初めてだったな。心配するな、父さんがついてる。」

心強い言葉で安心した。けれど違和感がなくならない。

少し行くと、空気が沈んでいる――そこだけは周りと違い、全く濡れていない。中央には祠があり、やはりそこも同じ状態だ。

（なんだ、この異様な存在感……それに、この祠……どこかで）

父は、あたかもそれに気付いていないように、奥へとずんずん行ってしまう。

少年は異様な空気の層に足を踏み入れ祠の前まで歩みより、質素な扉をおもむろに開く。迷いはない。祠自体は決して装飾が綺麗でも、鮮やかでもない。だが、少年はそれに魅かれていた。中には石版のような物がある。刻まれた文字は風化して読めないが、石版の

真ん中には小さな窪みがある。
「この窪み……まさか？！」
少年は胸に下げた首飾りを、ぐっとわしづかみにした。そして、その首飾りの牙――何かの生き物のものだろう、やけに生々しいそれを、石版の中に埋め込む。見事に型にはまったそれは、息吹を返すように、役目を果たすように、深い静寂を生んだ。
（なんだ……この感じ。それにこの祠、なんで……）
その直後だった。地が振動し、暗闇の奥から静寂を打ち砕くように、轟音が響いた。
「うわっ？！なんだ！？」
少年は視線を、音の先へと向ける。すると、間もなく濁流が一気に眼前に現れた。
「な、何が起きたんだ！？」
少年は水の流れから逃げようと少し走ったが、すぐに足を水にとられ、抵抗虚しく濁流に飲まれてしまう。そして、目を閉じた。

〈陸〉

耳障りな音が頭に響く。体を起こそうとしても、金縛りのように全身が言うことをきかない。びしょ濡れだということはすぐ分かった。
「くっ……動け…！……うっ」
頭を強く打ったせいか視界が極端に狭い。まるで目を閉じているように、目の前は真っ暗だ。
――……もう夜なのか？体が……それに、この音……頭が裂けそうだ……
呪文ともとれる調べ――恐ろしく肥大な憎悪が込められた、それは彼の鼓膜を引っかいた。だが、直ぐにそれは翼が空を割く音へと変わる。
代わりに少年はまた意識を失う。黒い雪が降った。

序章～源〔ゼロ〕～（後書き）

初投稿になります！目を通していただけて、本当にうれしいです♪長編の作品になりそうなので、応援して頂けるとありがたいです（ー｜ー；）それでは、何卒お願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7099a/

RUUCAMI　ADVENT

2010年10月9日06時45分発行